

作家出発期の小川未明

——ラフカディオ・ハーンとの関わりから——

中 島 国 彦

1 未明の出発期をどうとらえるか

小川未明の作家出発期を考えようとする時に想起される最も有名な言い回しは、三十三篇の小品を収録した未明の最初の単行本である第一創作集『愁人』(一九〇七・二五、隆文館)の巻頭の、坪内逍遙の「序」(同・五稿)の、次の一節である。

思ふに此作家の造詣は果して如何ばかりに及ぶべきか、今はもとより知りたしと雖も、其の作られたる人にあらずして生れたる人たることは争ふべからず。(傍点原文)

よく知られた「生れたる人」という有名な評言の出典だが、それは知己の言と言うより、いわく言い難い新進作家に出会った逍遙の、どう評したらよいか探るような心情から生まれたものではなかつたか。そうでなければ、早稲田に学びながらも、「諸講師の口頭より果して幾はくの獲る所かありし」とやや否定的に記し、次のようなやや苦しいが、正にこれが未明に他ならないという評言は、生れなかつたと思う。

十九世紀の初めにいでし独のロマンチストなどに類似せる性癖もあれば、ファン・ド・シエーケルの青年文士さながらなる特質もあり、期せずして今の所謂ナチュラリズムの流れに通ずる脈もあれば、お伽話めく空想も混ぜざるにあらず。しかもこれら諸要素は、何れも皆理論又は粉本などに継りて取入れたるにあらざるだけに、そこに多少の矛盾もあり、不調和もありて読過の際何となく未成品らしく感ぜらるゝ所あるをまぬがれず。さて措辭に至りては、修辭の正準よりすれば、格に入らざるものもとより多し、されどここに此作家の特長はあるなり。(傍点中島)

ロマン主義・自然主義・世紀末・幻想空間——それらのものが、正に渦巻いているのが小川未明なのだ、というのである。それらが、「矛盾」「不調和」「未成」という形で、無造作に置かれていゝる方向性が、他のものとの緊張関係で生まれ、言わば相対的に存在するのではなく、いわんや歴史的に時間の経過の中で成長・分化するというでもない。絶えず、それが次にどうなるのか

うかがえないような、一つのカオスとして存在するのだ。その意味では、後の童話作家への転身などは、カオスの収縮がもたらしたものに違いない。

小川未明が早稲田大学英文科を卒業したのは、一九〇五年（明治三八）七月の事である。初期作品として、卒業前には、逍遙の紹介で発表した『漂浪児』（一九〇四・九・一「新小説」）や『霞に雲』（一九〇五・三・一「同」）があり、卒業直後には逍遙の肝煎りで雑誌「早稲田学報」に関係するようになり、『紅雲郷』（同一・一・一九〇六・一・一「早稲田学報」）を発表している。その後、単行本『愁人』を刊行するまでは、二年も無い。その間、五十篇近い作品が書かれたのである。いずれも小品と言えるものであり、じっくりと原稿用紙に向かった様子はあまり感じられない。実は、『愁人』と題されてはいるものの、その名の作品は無く、未明は作品をまとめた折に、全体の情感を示す二文字として、この「愁」と「人」を選んだのである。う。「過去の筆致、着想共に自分の気に入らん」とは、未明自身の「自序」（一九〇七・六稿）の一節だが、『漂浪児』『霞に雲』『紅雲郷』という自信作は、四十四篇の作品を収録した第二創作集『緑髪』（同一・二・二五、隆文館）に残しているのである。⁽¹⁾

『愁人』には、まず自分の中の混沌を、そのまま外に押し出そうとした感がある。「自然や、人生に対する考は自分の境遇が異なるにつれて変つて行く。（中略）けれど、自分は何時までも子供でありたい。たとへ子供であることが出来なくても、子供のやうに美しい感情と、若やかな空想とをいつまでも持つてゐたい」と

いう『緑髪』の「自序」（一九〇七・二二稿）には、数年がかりで一つの方向性がやつと見えて来た未明の思いが、反映されていなか。大学卒業前後の数年は、未明にとつて、大切な模索の時期であつたのである。

そうした背景を考えるに当たつて、この数年が日本の近代文学の流れにおいても変化の多い、それゆえ意味深い時期であつたという事実を振り返らなければならない。未明の身近かでは、坪内逍遙以外に、ヨーロッパから帰国して、第二次「早稲田文学」創刊（一九〇六・一）の準備をしていた島村抱月の存在が、大きかつたろう。その意味で、「早稲田学報」に執筆するようになった未明が、同誌に作品以外に時評を書いていることは、もつと注意されていだろう。⁽²⁾ 降りかかる様々な文学的事象に対し、どう未明が自分の姿勢を作つて行つたかが、よくうかがえるからである。

2 一九〇六年の未明の時評から

未明の時評は、一九〇六年（明治三九）一月から「早稲田学報」に現われる。「新曲かくや姫を読んで所感を記す」（一九〇六・一・一）に引き続き、二月号（同一・二）に、小品『盲目』と同時に、時評として、「青春過ぎんとす」「似而非批評家」「片々録」の三篇を発表しているのに眼を注ごう。「青春過ぎんとす」は、「紅顔の青年！ 緑髪の少女！」という呼び掛けから始まる。未明にとつて、『緑髪』は青春の表象であつたのである。第二創作集『緑髪』のイメージは、こうしたところからも醸成されてきたろう。しかし、現実には、そうした若々しいエネルギーが損なわれていな

いか。「人間は人間としての天然の感情を自由に発露する権利を有してゐる」とする二十四歳の未明は、珍しく「形式的教育」を排し、次のように記す。

現代の教育には人生自然の本能を絶対的に抑圧せんとする

弊がある。何故に人間を人間らしく、発達せしめんのだ!

人間天性の自然の本能を障害するやうな権利が何処にある。

今日の「形式的教育」では何も育たないと考える未明は、更に「似而非批評家」の中では、それは「批評家」の責任でもある、とするのである。

それに対し、「片々録」は、わずか一ページだが、文字通りその年の文芸雑誌一月号の諸文に対する批評となつてゐる。触れられてゐるのは、「早稲田文学」では、抱月「囚はれたる文芸」と逍遙「百合若伝説の本源」、新小説「新小説」では、泉鏡花『海異記』と柳川春葉『文の使』、更に名前だけが児玉花外の詩集『ゆく雲』(同一・一、隆文館)が登場する。さまざまな文学現象を前に、自己の位置を見定めようとする姿勢が顕著である。抱月の長大な評論については、「智識といふ冷やかな手に囚はれて、悶えてゐる文芸」とまとめ、「今や墮落に傾きつゝ、ある文芸は、將に行路を一転して新しい、温かな、ひろくとした感情の大海原に浮かび出で、自由に、光明を慕ふ必要があるといふことが分る」と論じ、逍遙の研究については日本の伝統文学の「詩的趣味」を明らかにする。興味深いのは、鏡花作品に対する批判で、鏡花作品は、「二十世紀に出るやうな、ロマンチックの、或意味に於てのシンボリックの性質を具備してゐない」と喝破している点である。ロマン

主義・自然主義・世紀末・幻想空間など、様々な未明周辺の複雑な動きを見据えながら、どれにもめり込まないバランス感覚が感じられよう。

その延長で、わたくしが注目するのは、もう一つの「片々録」と題された時評(同六・一、執筆は五・一八、山田キチとの結婚二日前)の存在である。中島孤島の小説『新氣運』(同五・一「早稲田文学」)に触れた後、折から刊行されたメーテルリンク・西村醉夢訳『神秘論』(二九〇六・四・一五、岡村書店・福岡書店・自祐社)をめぐる、ある程度まとまった論評がなされているからである。「神秘」の語は、この時期の未明とも関連し、未明がどう発言しているかが、注目されるわけだ。『神秘論』という気になる表題が付けられたこの本は、訳者西村醉夢(真次、未明より三歳年長、ハーンの授業も聴講)が、メーテルリンクの評論集の英訳版『The Treasure of the Humble (Alfred Sutro 訳、George Allen & Unwin) に接し、「読みもてゆく中、不思議なる神秘の力に打たれて、恍惚たる折節訳し置きたるものありければ、それを輯めて一巻となし」(緒言)、全十篇のうち六篇を選んで翻訳刊行したものである。³⁾

この時期は、「早稲田文学」でも、長谷川天溪「メーテルリンクの神秘道徳論を読む」(一九〇六・四・一)が掲げられ、彼の神秘性が注目されていた。前年書かれたメーテルリンクの評論の英訳『Of Our Anxious Morality』(『The Forthrightly Review』1906.1)を読んだ天溪が、それを紹介した評論である。十六ページの比較長的長い評論だが、どうやら天溪は、「文章を読むために甚だしく多くの労力を要し」と記しているように、読解に難儀したようで、

必ずしもメーテルリンクに全面的に傾倒しての紹介ではなかつた。この時期の、メーテルリンク受容には、こうした側面が顕著である。何か興味深いことが書かれてるように思えても、それを充分こなした上で影響を受けるといふのでは、決してないのがある。

実は、西村酔夢にも、そうしたところがあつたようだ。未明は、『神秘論』をひもとき、「定めし此の『神秘論』は面白からうと読んで見た。併し其の意味の分らない所が多い。それは独り学説の高尚で、意味の深遠な為めばかりでなからう。一は訳者の注意が未だ十分に至らなかつたと思ふ」と批判する。メーテルリンクの観念が、日本の芸術状況に入つて来るには、まだまだ素地が弱かつたのである。それ以上にわたくしが興味深く思うのは、わずか三十行ほどの批評だが、いかにも未明らしい、メーテルリンクとの距離の測定が見られることである。未明のメーテルリンク受容の資料なので、少し長めに紹介しておく。

自分は嘗て此の神秘派の詩人の『アルガバインエンド、シエステイ』と云ふ劇を英訳で読んだことがある。其時自分の感じたのは恐怖と寂しみてあつた。壊れた塔が暗い嵐の吹く海辺の空に聳えてゐて、其処へ無邪気な、可憐な、不仕合せな年若い夫人が大きな鍵（寂然として、暗いランプの光の滅入る板敷の上にコトんと、音して落ちたことのある）を持つて、乱れた黒髪を嵐に吹かせて、恋の標章のやうな少女の手を取つて上つて行く処などは寂しいといふより寧ろ怖しい。海は荒れて種々な鳥が廢塔の周囲に飛廻つて叫ぶなどは

読んでゐても慄とするやう。しかし何処となく其の女の面影が慕はしい。温味がある。慰藉がある。而して久遠の恋と云ふやうな神秘の感想にうたれた。是れが此詩人の特色であらう。怖しいと云つて、アランポーのやうな刺激的の居堪らんやうな怖しさでない。寂しいといつて、ラフカディオ、ハーンのやうなたゞ純粹の寂味でない。同じ哲學的の、瞑想的の寂味であつても、何処か懷疑の暗が実在してゐたとへば智識の光りが灰色の空間に差込んで、ぼつとして明るくも暗くもない、一種神秘の領土の横はるがやうに思はれる。彼がイツセーとしての議論も、やはり此様な処がある。

メーテルリンクの *Aglanane et Selsette* の英訳の読書体験が語られるが、そこで強調されるのは、人間関係のドラマでは無く、舞台の一シーンのイメ、ジや情感である。劇中の人物名は全く無く、固有名詞・キャラクターが排され、「恐怖」「寂しみ」「神秘」とつながる形象にのみ、未明の関心は向けられる。「其の女の面影」こそ、重要なのだ。そうした点は、初期の未明作品のトーンにつながり、その多くが、固有名詞を排した「小品」のかたちをとっていることを思い出そう。⁽⁵⁾

「Silence」の中で、メーテルリンクは、次のように言う。英訳の一節を引く。

・ It is a thing that knows no limit, and before it all men are equal and the silence of king or slave, in presence of death, or grief, or love, reveals the same features, hides beneath its impenetrable mantle the self-same treasure. For this is

the essential silence of our soul, our most inviolable sanctuary, and its secret can never be lost.....

・ No sooner are the lips still than the soul awakes, and sets forth on its labours; for silence is an element that is full of surprise, danger and happiness, and in these the soul possesses itself in freedom.

「soul」と「silence」をめぐっての考察だが、未明はそれを觀念の次元で受け止めようとはしない。未明は、次のように、イメージ化するのである。未明の創作の秘密がうかがえるような、見事な説明である。

自分は『沈黙』の概念を人格化したならば、何でも寂しい大きな寺の広い座敷にたつた独り年間の尼が、白い綿帽子を被つて、黙々で西方向に坐つてゐるやうに思ふ。メイテルリシクの『沈黙』は其の尼さんが学者であつて時には哲学上の議論もし兼まじき趣味を有してゐる。

メイテルリシクの『神秘論』をめぐって考察を試みたが、大切なのはそうした関心が、この時期の特色の一つでもあつたということである。島崎藤村『破戒』（一九〇六・三・二五、自費出版）が評判になつていた頃、こうした「神秘」をめぐる言説が、静かに多くの文学者との関わりを持つていたのである。わたくしは、やや遅れた時期の証言として、北原白秋の最初の散文作品「印象日録」（一九〇八・一〇・一五「文庫」）のその年の九月七日の項に、「The Treasure of the Humble” Maeterlinck 丸善より着す」の一行が存在する事に注目してきた。白秋がどうしてこの英訳を手

入れようとしたかは、まだ定かではない。しかし、「印象日録」に示された時期は、白秋にとつても転換期の一つなのである。そうした多くの若い文学者にとつて緊張に満ちた時期に、どうメイテルリシクの評論が受容されたかを確かめるのは、興味深い作業であらう。

3 ラフカディオ・ハーンとの出会い

一九〇六年の「早稲田学報」での未明の執筆活動の一端を辿つて来たが、実はこの年の「早稲田学報」所載文章には、創作と時評の他に、もう一つの大事な文業がある。それは、他でもない、未明が一九〇四年（明治三七）に早稲田の教室で聴講したラフカディオ・ハーン（小泉八雲）についての連作評論である。未明は、「小泉八雲」ではなく、「ハーン」「ハーン先生」と記しているので、以下「ハーン」と呼びたい。

東京帝国大学を退任していたハーンが、早稲田大学の教壇に立つようになった経緯や、最初の授業が一九〇四年三月九日で、夏期休暇後の九月二十六日の心臓病による急死までの実質三十三日間の出講だったことなどについては、資料を博搜した関田かをる『小泉八雲と早稲田大学』（一九九九・五・二〇、恒文社）に詳しい。平川祐弘監修『小泉八雲事典』（二〇〇〇・一二・三〇、恒文社）には、「早稲田大学」「教え子」などの項目もあり、早稲田時代ハーンの授業を受けた学生の概略が知れる。早稲田の学生への影響は多くの文献によつて知れるが、講義の内容以上に、その風貌や声が若者に強い印象を与えたように思う。⁶

小川未明においては、どうか。未明の残したハーンの思い出の中で、中身があるものの一つが、「上京当時の回想―附・処女作のことども」（一九一四・五・一「文章世界」）である。ハーンの授業を聞いてから十年程後の回想なので、幾分相対化がされているが、「ハーン氏の書物の中で、最初に読んだのは『怪談』であった。この一冊は氏の総ての著作を私に求めさせた程、魅力があった」と書き出された回想は、貴重である。「講義は総て英語だったから私にはよく分らない処が多かつた」とも言うが、未明は次第にハーンの授業を聞く自分なりのスタイルを見つめる。

私はローマンチズムの十八世紀の末葉から十九世紀にかけての運動に就て、ハーン氏が講義されたこの時間には努めて出るようにしてゐた。矢張よく分らなかつたが、よく聴いてゐるうちにだん／＼分つて来た。そしてみんな他の学生はハーン氏の講義を忠実にせつせと筆記するので、私も初めのうちはそれをやつて見たが、下宿へ帰つて出して見ると、その筆記は間違ひだらけのやうな気がして、こんな位ならば筆記せずに、唯ちつと聴いてゐた方がい、だらうと思つて、それ切り筆記しなくなつた。

未明らしい判断である。しかし、ハーンの死後、未明は大学の卒業論文として、逍遙の指導のもと、「ハーン氏に就ての感想」を書くことになる。「ラフカディオ・ハーンを論ず」という題で知られているのが、それである（現物は発見されていない）。未明の書いた作品が膨大で、初期についての探索が充分でなかつた時期に、「早稲田学報」に未明がハーン論を連載しているのを初めて

確認、それが卒業論文と関係するに違ひないという指摘をしたのが、田中栄一「小川未明とラフカディオ・ハーン―『不可知』の意味の受容について―」（新潟県郷土作家叢書3『小川未明』、一九七七・二〇・二〇、野島出版）である。わずか一年の間だが、もう一度、未明の「早稲田学報」掲載の文章をまとめておく。創作・時評とハーン論が、どう絡まっているかを確認しよう（*印が、ハーンについての論考）。

一一二五号（一九〇五・一一・二）

『紅雲郷』（創作）

一一二六号（同二二・二）

『紅雲郷』続き

一一二八号（一九〇六・一一・二）

『紅雲郷』続き

「新曲かぐや姫を読んで所感を記す」（評論）

一一二九号（同二・二）

『盲目』（小品）

「青春過ぎんとす」「似而非批評家」「片々録」（感想・時評）

一一三〇号（三・二）

「坐ろにハーン氏を憶ふ」*

「片々録」

『稚児ヶ淵』（小品）

一一三二号（四・二）

「思想家としてのハーン氏」*

『漂浪者の群』（小品）

「緋桃録」(感想)

一三三号(五・二)

「思想家としてのハーン氏(再び)」(上の部分) *

一三三号(六・一)

「思想家としてのハーン氏」(中の部分) *

「片々録」

一三四号(七・二)

「思想家としてのハーン氏」(下の部分) *

「偶感」(感想)

一三五号(八・二)

「ハーン氏と米の短篇作家」 *

「ハーン氏の描ける女性」 *

「げに文致は人なりけり」 *

「ハーン氏と時代思潮」 *

「銷夏隨筆」(感想)

一三六号(九・一)

「ハーン氏と時代思潮」(下の部分) *

「変調子」(小品)

こうして見ると、この年のハーン論連作は、まとまるとかなり大部のものである。ハーン歿後のものとして、改めて記憶される内容を持つていよう。田中栄一氏は前出の論文で、近代がもたらした「危機的状況」における未明とハーンの関わりをベースに、未明がハーンに「漂泊者としての同情」を感じており、「ローマンなものへの憧憬」があったとし、未明のハーン論にハーンが影

響を受けた進化論をベースにしたスペンサーの学説への言及が多いことに注目、「進化論、不可知論、神秘主義、輪廻観」などを軸として、「両者の浪漫的なるものへの志向の呼吸がびつたりと合った」と緻密に論じている。「不可知」という概念に収斂させすぎたきらいがあるが、これまでの研究史を進展させた画期的な業績である。田中氏の視線が、「思想家としてのハーン氏」と題されたいくつかの論考の方に多く向けられたのも、その意味で納得がいく。

それに対し、最近明治期の未明の研究を推進する厚美尚子氏が、「梅花児童文学」を舞台に、田中氏の指摘を更に展開させた、「小川未明・文学観の形成—ラフカディオ・ハーン、坪内逍遙との関わりから—」(二〇〇四・六・一七「梅花児童文学」二二号)、「小川未明『紅雲郷』にみる独自性の萌芽—ラフカディオ・ハーン『The Dream of a Summer Day』に再話された『浦島』との比較から—」(二〇〇五・六・一七「同」一三三号)、「小川未明・小説に描いた少年の死—(母子関係)を中心に—」(二〇〇八・六・一七「同」一六号)の三篇の論文を発表している。厚美氏の新しさは、未明の論考の横に、師坪内逍遙の書いたハーン論である「故小泉八雲氏の著作について」(一九〇四・二・二一「新小説」)を置くことで、「未明と、逍遙の述べていることは、同じ部分がかなりあり、ハーン評価という点においては、ほぼ重なっている」ことを実証したこと、未明のハーン論に原文のまま引用されている英文の出典・典拠をほとんど明らかにしたこととの二点にある。

逍遙のハーン論については、田中氏は言及しておらず、未明の

書くものにしてはやや硬さの残っている感じのするハーン論連作に、逍遙の考え方が入っており、未明らしさがもう一つ足りない理由が明らかになったのは、貴重である。もちろん、二人の関係に関する理解を大幅に変えることは必要ないが、「早稲田学報」の未明のハーン論を正確に読むためには、その視点を忘れてはならないだろう。未明が、論考を書き継ぐ過程で、逍遙の何らかのアドバイスがあった可能性も残るように思う。評論としての骨格はあっても、何か未明の核になるものは、別の表現にあるのではないかと思われるのである。

4 未明のハーン文の引用の分析から

厚美尚子氏の業績で評価すべき点のもう一つは、未明のハーン論連作に原文で引用されている英文の出典を、ほとんどつきとめたことである。厚美氏は一番目と二番目の論文で、論中に引用された二十か所のハーン作品のうち、二か所を除き出典を明らかにしている。未明がハーン原書をよく読んでいたことは、本人の証言から理解出来るが、引用は、六篇のハーン文章、その収録単行本はわずか三冊という結果が出ている。

Out of the East: Reveries and Studies in New Japan (Houghton, Mifflin and Co. 1895) —— [At Hakata] → 「The Dream of a Summer Day」 〇二篇

Exotics and Retrospectives (Little, Brown and Co. 1898) —— [Of Moon Desire] 「A Red Sunset」 「Sadness in Beauty」 〇三篇

Kwaidan Stories and Studies of Strange Things (Houghton, Mifflin and Co. 1904) —— 「The Story of Miminashi-Hoichi」の一篇

この中で、『怪談』*Kwaidan* はあまり意味はなく、とすれば残ったのは、『東の国から』*Out of the East* と、『異国風物と回想』*Exotics and Retrospectives* の二冊となる。つまり、厚美氏の言うように、「水や月、自然と人間との関わり、日没、海、月夜の鬼火など、後の未明文学とも重なるモチーフが表れた作品を好んで取り上げている」ということになろう。

未明の読み方は、必ずしも体系的でない。気に入った箇所なら、何でもよかったかのようである。引用の英文の箇所は、比較的理解しやすい英文であり、景物や風景表象がかなり具体的で、わかりやすい部分である。卒業論文を書く時に手元にあった原書には、そうしたお気に入りの箇所がすぐさまわかるようになっていたのであろう。そんな想像もしてみたく感じる。

ハーン原文が最初に見えるのは、「坐ろにハーン氏を憶ふ」の最後の部分である。「氏一たび日本に入りて日本の風物に別様の色彩を加へ来らんとせしに」云々という行文で、ハーンの描く「月と水」に眼を向けた部分である。訳文も添える。

The subject is a Buddhist parable: the water is the Phantom-flux of sensations and ideas; the Moon — not its Distorted image — is the sole Truth.

あの画題は、あれは仏教の譬えはなしでしてね。水は知覚と観念のまぼろしの流れ、そしてお月さんは——歪んで映っ

た影でない方のほんとうの月は、あれは唯一無二の「真理」
なのです。
(平井呈一訳)⁽⁸⁾

『異国風物と回想』の一篇「月がほしい」(Of Moon Desire)の
中で、友人の言葉として語られるこの一節は、本来なら仏教的問
題が絡まり、扱いが難しいものだ。しかし、未明は、さらっと、
「月と水」の問題として処理する。「water」「moon」という単語
が、ハーンの文章に特徴的に出て来るといっただけで、未明はよ
かったのである。

「思想家としてのハーン氏(再び)」では、どうなるか。ここで
論じられているのが、「自然の光景」に見える「無窮の生命」で
あり、ハーンの「汎神的傾向」である。ハーンの「汎神教的の宇
宙観」について、スペンサーを援用して論ずる部分は、やや背伸
びの感があるが、自然現象をさらっと跡付けた部分には、未明の
資質が生きていよう。この論考でまず引かれるのが、自然を形象
化しつつ思いを述べた、『東の国から』の一篇「博多で」(In
Hakata)の一節である。「一」から二か所が引用され(一か所はや
や長めの部分を適当につきぎ合わせて構成されている)、ここで一気に、
今度は、「月がほしい」の一節に飛ぶ。手もとにあつた二冊の関
連部分を、自分はよく理解しているぞ、と言わんばかりの操作で
ある。

I remember when a boy lying on my back in the grass,
gazing into the summer blue above me, and wishing that I
could melt into it: — become a part of it.

少年のころ、草のなかに仰向けに寝ころんで、夏の青い空

をじっと見つめながら、ああ、自分もあのなかに溶けこんで
しまいたいなあ！ あの青い空の一部分に自分もなつてしま
いたいなあ！ と思ったことを、わたくしは今でも憶えてい
る。
(同)

こうした部分から始まる十行程が、やや長めに引用されてい
る。未明は、こうしたところに、自分と重なる記憶を見出したの
であろう。だから、未明の引用は、自分の論理ではなく、自分の
感性に響く部分のみに限られている。未明が引用した文章が、か
なり限定されていたのも、そのためなのだ。

わたくしたちは、こうして、厚美氏の指摘を手がかりに、未明
の引用の手付きから、未明の心情のメカニズムを理解することが
出来るのである。

5 『面影』——一つの極点として

「早稲田学報」所載のハーン論連作を考察して来たが、未明は、
それと前後して、短い文章ではあるが、ハーンへの思いを結晶さ
せたような一文を書いている。第一創作集「愁人」に収録されて
いる『面影 ハーン先生の一周忌に』(初出不詳)がそれである。全
四章からなる回想だが、「一」のみ他とトーンが違い、「独り、道
を歩きながら、考へるともなく寂しい景色が目の前に浮んで来て
胸に痛みを覚えるのが常である」と、淀んだ調子で書き出される。
「彼女」この関係はうまくいっておらず、悲しさの中で雑司ヶ谷
を歩き、「どれ、ハーン先生の墓にでも詣らう」と「一」は締め
くくられ、「二」以降の純粋なハーン先生回想に引き継がれて行

く。ハーンの一週忌と言えば、一九〇五年秋であるが、「二」の冒頭では、ハーン先生の姿を初めて見たのが、「思へば一昨年、ちょうど季節は夏の始めである」となっており、「一週忌」の設定とは合わない。『面影』執筆時期は、『愁人』巻末の「創作年月」の表によると、一九〇五年九月である。創作集収録時点で、何か操作がなされたのだろうか。

「自分」は、続く「二」で、ハーン先生の事を思い起こし、「今も尚ほ優しい余韻のある、情熱の籠つてゐる講義の音が律呂的に耳許に響いてゐるやうな」と感じる。例によって、講義の内容ではない。大事なものは、リズムミカルな「声」なのである。そうして、ハーン先生を規定する語として、「漂流児」という言葉が提出される。「漂流児」は、「三」では「漂流人」、さらに「漂流人」「さすらへ人」と変奏され、「四」で「さすらへ人」の語は繰り返されている。ハーン「さすらへ人」、この関係を印象付けるのが、『面影』一篇の趣旨であつたらう。

この一文の中に、英語が二か所出て来る。北国の海を「自分」は思い返し、ハーン「夏の日の夢」の一節を書き付ける。Out of the East からの引用は正確だから、この文章を書く時には、必ず原書が手元にあつたはずである。浦島の話の、こんな一節である。

Summer days were then as now. — all drowsy and tender blue, with only some light, pure white clouds hanging over the mirror of the sea.

そのころも、夏の日といえは、むかしも今も、かわりはな

い。鏡のような海の上には、いくひらかの軽やかな白い浮き雲が空にかかっているばかり。
(平井呈一訳)

「自分」もこれと同じ情感を背負いながら、「日本海の風に吹かれて」風景を見つめるのだ。そこから生まれるのが、「赤、黄、緑、青、何でも輪郭の顕著なる色彩を用ひ、悠々たる自然や、黙静の神秘を物哀れに写す力があつたのが彼の人の特長である」という説明である。色彩の描写が、ハーンは独特であるというのである。あの、「げに文致は人なりけり」に通ずる内容である。

もう一つの英文は、ハーンが授業中にふと漏らした、「とんぼつり、今日はどこまで行つたやら」の英訳「Catching dragonflies..... I wonder were he has gone to-day!」である。これは、恐らく未明の記憶の中にある英文なのであろう。

こう考へて来て、わたくしは、「Summer days」の一語から始まる数行に続く部分を、想起する。

Then, too, were the hills the same. — far blue soft shapes melting into the blue sky. And the winds were lazy.

あとはただ、見ていると瞳までじんわりと溶けてきそうなの、のんびりとした浅黄いろが、水と空とを領しているばかりである。そのあざぎ色の空に融けこんでいる、遠い鳥山の模糊たるすがた、それややはり、今とすこしもかわりがない。吹く風は、いかにもものうげである。
(同)

わたくしが興味深く思うのは、引用した最後の部分にある「lazy」(怠惰な、のろい)の一語である。引用はされてはいないが、正にこの『面影』の一文、更には「さすらへ人」の情感は、この

「lazy」に通ずるのではあるまいか。近代を支える基本理念である「論理」の時代にあつて、この「情感」への凝視は、確かにある弱みがあるかもしれない。しかし、そこを立脚点に、何かが生まれるかも知れないのである。

「lazy」は、また表現のメカニズムでもあることに眼を注ぐ。何故なら、引用したこの部分は、「早稲田学報」所載のハーン論連作のうち、八月号に載つた「げに文致は人なりけり」に、原文のまま引用されている箇所なのである。「時として、描写の余りに巧妙なるがためにや、読者に実感を催さしむる魔力あり、其例として、左に二三を掲げんとして二か所の例が引かれてゐる。その最初が「And the winds were lazy」から始まる一節である。ただし、この中で、興味深い事実がある。誌面で三行ほどの引用だが、この部分のみ、必ずしも正確な引用がなされていないのだ。と言うより、やや長めの部分から、断りもなしに「中略を示す……」など、をいちいち添えずに、必要な部分のみをつなぎ合わせているのである。もう一度、ハーンの見事な浦島物語の描写を辿ってみよう。

And the winds were lazy

And presently the boy also lazy, let his boat drift as he fished. It was a queer boat, unpainted and rudderless, of a shape you probably never saw. But still, after fourteen hundred years, there are such boats to be seen in front of the ancient fishing-hamlets of the coast of the Sea of Japan.
After long waiting, Urashima caught something, and

drew it up to him. But he found it was only a tortoise.

Now a tortoise is sacred to the Dragon God of the Sea, and the period of its natural life is a thousand — some say ten thousand — years. So that to kill it is very wrong. The boy gently unfastened the creature from his line, and set it free, with a prayer to the gods.

But he caught nothing more. And the day was very warm, and sea and air and all things were very, very silent.

And a great drowsiness grew upon him, — and he slept in his drifting boat.

ところが、ビウしたものが、それきり、えものらしいものが、さうばかりかかつてこない。その日はまたひどく暑い日で、海も、風も、なにもかもがじーんと鳴りをしずめたようである。波ひとつそよりともしない。そのうちに、なんともたとえようのないような眠げが、浦島をおそつてきた。——浦島は、とうとう、波にただよう小舟の中で、そのまま正体もなく眠りこんでしまったのである。（同、終わりの四行分のみ）

傍線を引いた部分を、うまくつなぎ合わせて、未明は、「読者に実感を催さしむる魔力」がある表現として例示するのである。観察すると、その部分は、浦島という固有の人物ではなく、もっと普遍的な情景描写が展開する部分であることがわかる。人物を示す語は、終わりの方にある「he」のみなのだ。「Urashima」[him]などは、背後に押しやられている。傍線の部分のみ辿れば、これは浦島の話ではなく、もっと普遍的な広がりのある描写を形

成していることが理解出来よう。ハーンは、ここで、確かに浦島
の物語を展開はしている。が、その中で、ハーンは別の次元で、
さらに普遍的な、もつと正確に言えば、自分自身の世界に通ずる
ような、言葉で形成されている不思議な世界を打ち立ててしまっ
ているのだ。未明は、そのことに、気付いていた。だから、未明
の書くものは、固有名詞は極力排された、独特の世界になったの
である。

すでに、明らかであろう。『夏の日の夢』と一緒に、名文とし
て紹介されているもう一つの原文が、手もとにあつたであろう
Exotics and Retrospectives の、「美の中の悲哀」(Sadness in
Beauty) の次のような一節であつたのも、よく理解出来るのであ
る。ここにも、実は人間はいない。あるのは、そうした風景表象
を前に、それをじっと見つめる類いまれな眼、微妙に心を震わせ
ている感性そのものなのである。

A wonderful night — a tropical night for instance, lucent
and lukewarm, with a new moon in it, curved and yellow
like a ripe banana — (may inspire, among other minor feel-
ings, something of tenderness; but the great dominant
emotion evoked by the splendor of the vision is not sad-
ness.)

すばらしい夜——たとえば、熟したバナナのように反つた
新月が空にかかったときの、あのきらきらした熱帯の夜など
は、(ほかの群小の感情のなかに、なにか嫋々たる感じをか
きおこす) こともあるが、しかしあの眺めの華麗な感じは、あ

れは悲哀ではない。)

(同)

(一) の部分は、省略された部分であり、未明は、「tenderness」
「dominant」などの単語をええればいいのだ、と主張しているか
のようである。未明は、「げに文致は人なりけり」で、「複雑なる
美を綜合するに氏は独特の神秘的色彩を施し、是を律呂的に表象
する天才を有せしなり」と論じるが、未明の引用の仕方こそ、そ
れにふさわしいやり方でなされていたのである。

ここまで論じて来て、やっと『面影』の世界に戻ることが出来
るように思う。未明は、この文章に、「ハーン先生の面影」とい
う題名を与えなかつた。ここにあるのは、ハーンを超えた、「彼女」
の「面影」であり、ある永遠なるものの「存在」のけはいであり、
「漂浪児」「さすらへ人」の「面影」でもあり、「自分」の「面影」
でもあつたのである。言わば、「面影」という「存在」のあり方が、
この文章からうかがえるのである。

6 新しい文学史への視点構築のために

わたくしは、この論文を、小川未明の出発期、明治末の文学状
況の中で未明をどうとらえたらよいかの難しさの確認から始め
た。ここまで論じて来ても、必ずしもその手がかりがはつきりし
たわけではない。未明の文学史的位置づけは、確かな答が出ていな
いだろう。例えば、前に引いた未明のハーン回想である「上京当
時の回想―附・処女作のこと」を改めて読んでも、問題は山積み
である。わたくしは、ハーン回想の部分も貴重だが、この文章の
類いまれな文学史的意味は、自己の出発期を、やや離れた時点か

ら観察した、次の一節にあるように思う。「ハーン氏と時代思潮」は、未明がハーンを時代の中に置こうとした論考である。この部分は、眼は自分自身に向けられている。

私が文壇に出かけた時分から漸く自然主義が起りかけてゐた。その主義の批評家から私の書いたものは空想の勝つた、生活に触れない無価値なものであると云ふやうな悪評を受けた。けれど日本の過去において、彼の英国に於けるやうな、若しくは私達に於けるやうな、人生及び自然を観ずる上に於て、コスモポリタン若しくはバンスイズムの哲学を基礎としたやうな真のロマンチズムの運動があつたか、と云ふと、私は何うしてもそれを認めることが出来ない。(中略)同じく空想、想像、架空的と云つたところで、その性質によつていろいろに異ふ。同じ美に対する憧憬にしてもある理想に対する向上にしても、その主観的解釈によつて、いろいろに異ふものである。真の憧憬、真の苦悶は果して人生に無価値と云ふことが出来やうか。然し当時の其の方面の批評家は芸術上のロマンチズムと云ふものを唯、価値なき夢のやうなものであると解釈してゐたのは非常な誤謬であつたと思ふ。主観の嚴肅と反省と云ふこと、芸術上の自然主義とは別なものである。

ここで語られているのは、「イズム」「主義」「解釈」という觀念や行為が、いかに弱いものであるか、ということである。わたくしたちは、それを乗り越えるすべを、まだ必ずしも持っていない。考えられるのは、文学者が言葉を紡いでいく時のこのころの形

に、ある一定の説明を与えられないかということである。固有名詞のない世界で物事を考えることは、いったいどういふことなのか。そうした問いかけでもよい。あるいは、ささやかな単語一語、例えば、「lazy」といふ一語を見据えるのもよい。

その意味で、わたくしに想起されるのは、例えば次のような英語による表現である。日本語で書くのとは違い、英語の単語をまざぐつて行くことによつて、何かが見えるかもしれないという、精神の営みがここにある。

The sea is lazy calm and I am dull to the core, lying in my long chair on deck. The laden sky overhead seems as devoid of life as the dark expanse of the waters around, blending their dullness together beyond the distant horizon as if in sympathetic stolidity.

大海は悠然として静かであり、余は心の底まで倦怠を覚え、甲板の長椅子に長々と身を横たえている。見上げれば曇天の天空は、四辺に広がる漆黒の海原と同じように生氣を失い、遠い水平線の彼方において、あたかも互いの倦怠感に共感するかのやうに海と空とが融合しつゝある。(岡三郎訳)¹⁰⁾

よく知られた、留学途中の夏目漱石がインド洋上で書いた英文断片(一九〇〇・二〇稿)の冒頭である。わたくしが想起したのは、「lazy」のバリエーションである。「lazy」という単語が使われ印象的だったからだが、この時の漱石が、英語を通して、自分でも制御出来ないやうな、ある生々しい自己の情感に、何とかかたちを与えようとしているさまが、よくうかがえるからでもある。

二十行程後に、わたくしたちは、この断片の先に、「the kingdom of absoluteness」「the realm of transparency」「the world of real activity」といった表現に出会う。「絶対の王国」「純一無雑の世界」「真に生き生きとした世界」と訳されるこの表現は、何を意味するのか。「lazy」な海と、そうした世界は、どうつながっているのか。あるいは、どうしてこの時期の文学者は、こうした冒険に満ちた想念に浸らなければならなかったのか。こんなことまで考えさせられる、不思議な言語世界である。

小川未明の特異な表現も、この延長線上にある。未明の場合は、否が応でもそうした言語を繰らなければならなかった資質があり、それがおのずと現われて来てしまい、意識的な表現行為を心がけなくてもよかったのではないか。ここに、未明の光栄と悲劇とが存在する。その実態を明らかにするためには、ハーンの影響の分析から離れ、構想を新たにしなければならない。

注(1) 『愁人』と同じように、『緑髪』にも、『緑髪』という表題の作品は、入っていない。

(2) 未明は抱月より逍遙に近かったので、第二次「早稲田文学」の手伝いをするようにするのは、復刊から少し遅れてからである。

(3) 英訳初版は、一八九七年三月。以後増刷が繰り返され、ポケット版も出た。『Silence』『The Awakening of the Soul』『The Predestined』『Mystic Morality』『On Women』『The Tragical in Daily Life』『The Star』『The Invisible Goodness』『The Deeper Life』

『The Inner Beauty』のうち、訳されているのは、「沈黙」「靈魂の覚醒」「先定論」「神秘的道徳」「婦人論」「不見之善」の六篇。

(4) 長谷川天溪のメーテルリンク受容については、中村良雄「メーテルリンクの受容（白鳥と天溪の周囲）」（『明治翻訳文学全集』〈新聞雑誌編〉49 メーテルリンク集、一九九・五・二八、大空社）参照。

(5) こうした点については、かつて、「小川未明の東京風景——東京が描くもの——」（二〇〇九・九・二七）、「三」「小川未明の東京——童話作家宣言まで——」展図録、小川未明文学館で考えたことがある。

(6) この点については、別稿を用意している。

(7) 『定本小川未明小説全集』第六卷（一九七九・一〇・一、講談社）所載「作品年表」には若干の漏れがあるので、一部補った。

(8) 平井呈一訳の文章は、全て、『小泉八雲作品集』（一九七五〜七六、恒文社）による。

(9) 山田キチを知り、キチが日本女子大学附属高等学校を卒業するのを待って未明が結婚したのは、一九〇六年五月二十日のことである。

(10) 『漱石全集』第十九卷（一九九五・一一・二八、岩波書店）の「注解」。

* 本稿は、早稲田大学国際言語文化研究所主催の公開シンポジウム「小泉八雲と早稲田大学」（二〇一〇・一一・二九、大隈小講堂）での、「小泉八雲と早稲田の文人たち」と題する講演の問題提起を端緒に、小川未明の部分を中心に発展させたものである。講演の他の部分については、別稿を用意したいと思っている。